



## 高橋 久夫氏

東京団地倉庫社長



たかはし・ひさお 75(昭和50)年明治大商卒、ヤマタネ入社。07年取締役国際本部長兼海外引越営業部長。14年4月常務取締役を経て、同年6月から現職。65歳。

## 次の50年へアイデア具体化

東京団地倉庫は創業50周年を迎えた今年秋、次の50年を見据えた「中長期経営計画」を公表した。高橋社長は2014年7月の着任後、翌年10月に策定した「中長期経営指針」をベースに社内、関係者との協議を重ねてきた。

計画には、平和島、板橋、足立、葛西の都内4事業所を運営するが、06年までに再整備を終えた平和島拠点を除き、経年化が進んだ3事業所の建て替えを

## 若手・中堅採用 「団地イズム」継承

盛り込む。大幅な運用面積アップやアメニティー施設の刷新、周辺企業との連携など、さまざまなアイデアの具体化に向け、今後入居企業など関係者と詳細を慎重に詰めていく。

倉庫会社103社が株主。うち54社がテナントでもあり、協同組合的な性格も持つ。「われわれは施設を貸すだけの単なる不動産会社ではない。例えばスペースが空いたテナントA社と、荷物があふれ気味のB社があれば、

は、間を取り持ち、スペースを融通することもできる。株主でもある倉庫会社が、事業を行いやすいような賃料水準でお貸しするのが本分で、メンテナンスなどにも相当投資を行っている」と、自社の事業方針について説明する。スペースマッチングは今年初めからホームページ内に空き情報などを掲載。個別のやりとりだけでなく、社名を出したくない企業については、東京団地倉庫が仲介役となってマッチングを行うこともできる。現在板橋事業所だけが対象だが、年明け以降、他の事業所にも展開していく方針だ。

ハード面の刷新にとどまらず、人事などソフト面の改善にも着手した。電気系統など専門の資格が必要な業務を担当する「技術職」は従来、電力会社など出身のベテランを採用していたが「何十年も社会経験を積んだ方たちに、われわれの会社のやり方、団地イズム」を持っていただくのは難しい」。現在は技術職でも積極的に20-30代の若手・中堅人材を採用している。

さらに初の新卒採用も実施。17年4月に2人が入社し、18年度以降も継続採用していく方針だ。

ヤマタネ時代は国際畑を長く歩む。東京団地倉庫との接点はゼロではなかったが、「正直、業務上意識することはあまりなかった」という。

海外引越営業部長時代は、当時赤字だった事業を黒字転換。閑散期でも一定の利益を生む事業として、収益の一つの柱と認識されるまでに育てた。大手と伍しながらの営業強化や、協力会社のネットワーク化を通して、閑散期でも利益を出せる筋肉質の組織に変革。この経験は、東京団地倉庫を率いる上でも生きていくという。また、05年設立の海外引越事業者団体JIMAの初代会長も務めた。

プライベートでは、健康のためにマラソンをたしなむ。ハイフマラソン、10キロマラソンを中心に大会にエントリーし、「時間があれば年がら年中走ってます」と笑う。

(岬洋平)